『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol.10

●テキスト　**中野敏男『継続する植民地主義の思想史』序章/第七章**（青土社、2024年12月）
中野敏男「継続する植民地主義としての「昭和」」（『現代思想』2025年8月号）

第10回読書会は、前掲書の序章（pp.11–39）と第七章（pp.308–348）、あわせて『現代思想』掲載論考を、著者・中野敏男さんと共に読み、討議します。

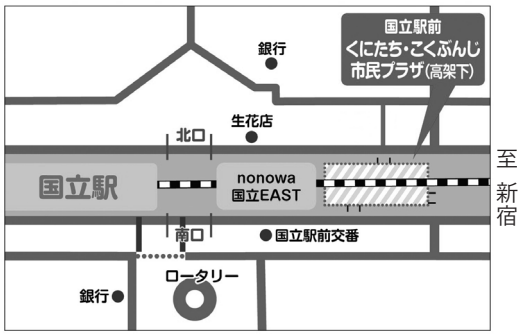
『継続する植民地主義の思想史』目次

序章　継続する植民地主義を問題とする視角
第1部　植民地主義の総力戦体制と合理性／主体性-合理主義と主体形成の隘路　第1章 植民地主義の変容と合理主義の行方–合理主義に拠る参与と抵抗の罠／第2章 植民地帝国の総力戦体制と主体性希求の隘路–三木清の弁証法と主体
第2部　詩人たちの戦時翼賛と戦後詩への継続　第3章 近代的主体への欲望と『暗愚な戦争』という記憶–高村光太郎の道程／第4章 戦後文化運動・サークル詩運動に継続する戦時経験–近藤東のメカニズム
第3部　「戦後言論」の生成と植民地主義の継続-岐路を精査する　第5章 言説空間の生成と封印される植民地支配の記憶／第6章 戦後経済政策思想の合理主義と複合化する植民地主義
第4部　戦後革命の挫折／「アジア」への視座の罠　**第7章 自閉していく戦後革命路線と植民地主義の忘却**／第8章「方法としてのアジア」の陥穽／主体を割るという対抗
第5部　植民地主義を超克する道への模索　第9章 植民地主義を超克する民衆の出逢いを求めて
結章

日時　**9月21日（日）午後１時15分～４時半**

場所　**くにたち・こくぶんじ市民プラザ 会議室**
JR中央線「国立」駅前、国立市北1-14-1

13：30～14：30　コメント
（須田光照、前田年昭、キム・ヨンイル）
14：30～15：15　報告と応答（中野敏男）
15：25～16：30　討議



会場は、JR中央線高架下です

参加費　**ひとり500円（要予約）**

主催（予約）前田年昭　メール　tmaeda1966516@gmail.com
電話　080–5075–6869

○参加希望の方は事前にお申し込みください（電話・メール）。
○当日は報告者の提起と感想や意見の交流、討議を行います。あらかじめ対象テキストを読んできてください。

第1回読書会で「回想記」の歴史的背景、朝鮮人民の抗日革命闘争史を学んだ私たちは、第2、3、4回で各自が選んだ回想記について報告、討議しました。第5、6回では、梶村秀樹『排外主義克服のための朝鮮史』から日本労働者のなかにある民族排外主義の克服への歴史的な手がかりを探り、第7回で回想記に戻った後、第8回では金相泰（キム・サンテ）『ある被抑圧者の手記』から戦前の日朝労働者の連帯の歴史を学び、第9回で再び回想記について討議しました。

第10回は、『継続する植民地主義の思想史』について、日本共産党の戦後における国際主義を問うた第七章を、序章および本書のエッセンスともいえる『現代思想』論考とともに読みます。中野敏男さんはこの本で、植民地主義を過去のこととしてその清算を論じるのではなく、現在も継続するものとしてとらえ、それがどのような思想によって支えられてきたのかを追究しています。排外主義を他人事ではなく私たち自身の問題として捉えるうえで有益だと思います。当日は、3人によるコメント（裏面参照）のあと、中野さんの報告と応答を得て、参加者全員で討議する予定です。

日本の労働者人民のなかで、また反権力運動のなかですら、いまだに排外主義は克服できていません。私たちは、抗日パルチザン闘争と在日朝鮮人運動から先人の闘いを知り、学ぶことを通じて、私たち自身の生きる糧としての国際主義を学ぼうとしてきました。国際主義の伝統はどこにあったのか。労働者に国境はありません。なぜいがみあい対立しなければならないのか、どうすれば手を繋ぐことができるのか。ともに読み、考え、話し合いましょう。

『翻訳と連帯　ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』
（編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ）
※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト https://do-cks.net/works/publication/korea05/ で読めます。QRコードは⇨
264話全訳データは　https://fire.st/h6yq1ut にあります。

抑圧民族に亀裂を入れるプロレタリア国際主義の実践を

この国で植民地主義が継続している歴史に著者は両大戦のはざまに国家官僚が担った産業合理化政策にその結節点を見る。帝国本国と植民地を貫く総力戦体制の構築に向けて計画性と科学性で追求された合理主義は、植民地の被抑圧民族にとって暴力でしかなかった。にもかかわらず帝国本国の抑圧民族（われわれ）は現在も他民族を収奪し、「日本人ファースト」と人間を序列化する合理性という傲慢な思想を持ち続けている。

著者の論考を読んで80年前の敗戦時にわれわれは考え違いをしたという思いを強くした。「誰に、何に負けたのか」という問題である。欧米の合理化された物量との対決で日本は負けたと思い込まされている。だから戦後は物質的な豊かさをいっそう追求する生き方を選び、ゆえに植民地主義の断絶ではなく存続の道を歩んだ。

あの戦争でわれわれが負けた本当の相手とは植民地だった中国や朝鮮などの被抑圧民族ではなかったか。その「小さな民」が繰り広げた抗日パルチザン闘争には人間存在の輝きがあった。「弱者」がより弱い者を抑圧して「強者」に成り上がるドレイ根性をなくす政治をはらんでいた。欧米や日本の合理主義では感受し難いが、新しい人間と世界に向かう思想精神の力にこそ打倒されたと認め、学ぶことから戦後を再出発させるべきだった。

著書の注釈にもあるが、米国が朝鮮での自主的な共和国樹立を否認した同じ日に刑務所から釈放された日本共産党幹部らは米国の占領軍を「解放軍」と規定した。戦後革命も植民地・朝鮮への視点を内在させないまま再出発したのだ。在日朝鮮人で日本共産党員だった金斗鎔（キム・トゥヨン）によるプロレタリア国際主義に基づく愚直なまでの尽力に反して党中枢は「日本民族の被害」なる虚構に自閉していったという論述に日本の労働者階級人民の一員として恥じ入るほかない。

「加害を直視しなければ歴史に立ち向かえない日本人にとっては民族に亀裂をもたらすがそれにより歴史を真っ当にわがものとする」と記された部分に、抑圧民族たるわれわれが持つべき思想的かつ実践的な構えへの示唆があると思う。

民族に亀裂を入れるとはどういうことか。総力戦体制からの分離、すなわち植民地主義が生み出す超過利潤により相対的に高い収入と安楽な地位を得ている「国民」から割って出ようと自他に呼びかける運動、自分たちの利害をプロレタリア国際主義の利益に従属させる態度ではないだろうか。

そんな不合理に見える思想と行動を起動させるには、かつて朝鮮戦争反対で日本人と在日朝鮮人が隊伍を組んで闘ったような被抑圧民族との出会いと協同が欠かせない。「外国人との多文化共生」といった言葉では到底間に合わない。資本主義・帝国主義に不可避な物質的根拠である植民地主義を廃絶するための国境をこえた労働者人民の共同事業を、わたしは「世界社会主義革命」の言葉でしか表現できない。革命はまたやり直せるはずだ。

（須田光照）

加害と植民地主義の忘却は、反権力運動堕落の第一歩

私がこの本から学んだことの**第一**は、抑圧民族である日本民族に亀裂を入れる意義についてである。

1948年頃からの数年間の日朝の共同戦線の位置づけ変化を検討して著者は次のように書いている。

「日本共産党と在日朝鮮人運動との分かれも、この党の路線という視点から見ると、日本人という民族に基盤を求めて次第に深みにはまったこの展開の必然的な帰結であると理解しなければならない。ここには、加害を直視しなければ歴史に立ち向かえない日本人にとっては民族に亀裂をもたらすがそれにより歴史を真っ当にわがものとすることが可能になり、植民地主義に規定され続けた在日朝鮮人にとっては民族の自己主張が抵抗を不可避とするはずの、継続する植民地主義との闘いの共同戦線は開かれていない。」〔340頁〕

1948年の阪神教育闘争は、植民地主義に対する日朝連帯の共同闘争であり、それゆえに日本民族に亀裂が入り亀裂は党に反映した。阪神教育闘争では、党中央書記局が闘った党関西地方委員会に「朝聯行事への参加禁止」処分を下したことは、日本共産党が「戦後憲法体制内の政党に」路線転換していく端緒となった（五全協で、変革主体を人民から国民へ変更し、六全協に至る）。阪神教育闘争を「多文化共生」の闘いとして位置づけようとする主張は、思想史的には的外れ、端的に言えば裏切りである。労働者は、加害を忘却し被害意識に立つ日本民族とは「共生」することはできない。

第二に学んだことは、論争を外に広くひらくことの意義についてである。従来、団結と統一の回復としてたたえられてきた六全協が、51年綱領が「完全に正しい」との共通認識に立っていたとの指摘〔346頁〕に、私は驚く。対立してきた所感派と国際派の双方が、基本的な戦略において「民族の被害という図式と植民地主義の忘却」を肯定していたことは間違いない。これまで私は繰り返し調べたが、所感派と国際派とは何をめぐるどういう対立だったのか、判然としない。戦前の講座派と労農派との日本資本主義論争は、より困難で苛烈な状況下ではあったが、党の内外、学問的にもひらかれたものとして、後世の私たちからみても、闘いに直結する必要な論争だったと分かる。それに対し、50年分裂とその〝手打ち〟としての六全協は、思想史的にみれば労働者人民の立場から遊離していたのではなかったか。

第三に、植民地主義に対する闘いの主体として提起されている「小さな民」の視点には疑問を持った。ソ連・中国の変質、社会主義の敗北を「大きな物語」の終焉と捉える思想に対しては、帝国主義か社会主義か、排外主義か反植民地主義か、という正面からの思想の戦争で立ち向かわなければ、継続する植民地主義と闘いぬけない。「小さな民」の解放は社会主義という「大きな物語」の下で史実として存在したのでなかったか。

植民地宗主国、帝国主義本国にあっては、民族のみならず、労働者自身にも〈亀裂〉、批判が求められる。ひとにぎりの「強」国は、自国のプロレタリアートの上層部も含めて、「幾億の非文明諸民族の費用で生活している」とのレーニンの指摘は、排外主義克服のための基本的、根本的な事実認識であり、「資本主義のもとでプロレタリアの多数者を組織に加入させることができるなどとは、本気には考えられない」というレーニンの指摘は、全国民的革命という幻想をきっぱりと断ち切れとの呼びかけである。帝国主義国、抑圧民族の労働者人民は、世界の労働者階級、被抑圧民族と連帯して植民地主義と闘おう。

（前田年昭）

戦争とは他の手段をもってする経済の継続である

1945年の敗戦をもって日帝とその植民地主義は消滅し、軍国主義から平和主義へ転換したというような歴史観への批判は反体制運動の中で繰り返し述べられてきたが、それでもなお8・15をメルクマールとして単純化する向きは多い。それは、負債を清算するという言い方に端的に表れており（歴史修正主義者の言う「いつまで謝罪しなければならないのか」と表裏をなしている）、現在に至る歴史の連続性を見落としている。

植民地の争奪戦が世界戦争の契機だとするなら、民族自決が優勢になるにつれ植民地支配の様態は形を変えていった。日帝の旧植民地への賠償はサンフランシスコ講和条約により生産物と役務をもってなすと定められたことでそれを新たな需要として利益を得たし（賠償特需）、植民地支配への協力者だった者たちによって成立した独裁政権とは賠償と開発援助という形で結びつき「経済成長」と引き換えに体制を支えた。

「戦争とは他の手段をもってする政治の継続である」と言ったのはクラウゼヴィッツであったが、戦争が資源と市場と労働力の収奪を目的とするなら、他の手段をもってする「経済」の継続と言えないだろうか。

一方、人々はいかにして植民地主義に抗ってきたのか。本書第七章では、1945年から55年にかけての日本共産党と在日朝鮮人運動に焦点を当てていく。

金斗鎔（キム・トゥヨン）は、1946年に日本共産党員として朝鮮の独立と天皇制の打倒を呼びかけた。これは連合軍占領下の情勢を鑑みても朝日人民の解放のための現実的な課題であったわけだが、のちに朴慶植（パク・キョンシク）は民族解放闘争を階級に解消し日本革命に従属させ利用するものとして厳しく批判した。しかし、階級闘争と民族解放は性差別やその他の支配の様態と交差し結びついているので、分離できるわけでも、またすべきでもなく、むしろ国際主義のあるべき姿を示していたように思う。だがその後、天皇免責を目論んだ新憲法が現実味を帯びてくる第五回大会で、天皇制との妥協という日本共産党の後退と変質は明らかになった。また、55年には朝鮮人党員の党籍排除と、DPRKの対外政策転換が、日本共産党と在日朝鮮人運動の分岐を決定的にした。そしてそれは、国際主義を担保した国際共産主義運動が瓦解していく過程と軌を一にしていたと言えるだろう。

では、日本人民はいかにして民族を立ち上げ損ねたのか。確かに、市井の人々にとって被占領経験は被害であるに違いない。ヒロシマナガサキの経験もそうだろう。しかし、自国の帝国主義に抗えないのは、体制への適応をさも抵抗であるかのように合理化する思想的弱さにあるのではないか。

となると、帝国が敗北した後の民族主義と植民地支配からの解放を目指す民族主義にはいかなる差異があるのか。植民地では、生存を支える諸条件が破壊され、倫理と尊厳が激しく傷つけられる。民族解放闘争といったときに、そこで民族ということばは、奪われ傷つけられたものの回復を指し示すのであるが、すでに原状は失われているし、「かつてあった」「ありうべき」本質を打ち立てることもできない。つまりは来るべき秩序を構想することに他ならないのである。

私は、植民地主義を批判するにあたって民族という概念は破棄すべきでなく、むしろそのポテンシャルを開花させるべきと考える。

（キム・ヨンイル）